

四月・ゆっくりと

清水 光子

どこもかしこも白一色、雪、雪、ああ、早く春にならないかなあ、って、私、本当に春を待ってた。土の色と匂いに慣れてた——。今やっと春が来た。雪どけ水が音を立てて流れている。そこに水仙やヒヤシンスが芽を出したと思う間もなく、毎日毎日、ほんとうに毎日、空のどこからか引っぱられてでもいるように伸び、筆の穂先のような蕾がふくらんでくる。胸がわくわくして、黒い土の上を大声で叫びながら走りたい！ そんなことばを雪国の少女が言った、四月のはじめ。少年達はすでに原っぱでサッカーボールを空をめがけてけり上げている。屋根の雪の残りが、その喚声でどうかするとなだれになって大きな音をたてて滑りおちる。数十年前、北海道でのこと。

自然は人のねがい、思いにかかわりなく巡ってくる。しかも先へ先へと準備しながらで

ある。それに気がついて、心をときめかせるのは大人より子どもの方が強いのかも知れない。『誰でもずっと前は子どもだった』のにどうしてその感じ方が鈍くなってしまったのだろうか。

四月、はじめての集団生活に入ってとてもたよりない気持、やるせないような気持でいる子ども達。A君は新しい運動靴にはきかえて、先生の手を握って保育室の前の庭に出た。花だんをみたら、何と蟻がいるではないか！花だんのふちの桜草の根元に、あゝ、いくつもいる。A君は先生に知らせたかった。でも先生はブランコにいる友だちの方へ誘っていく。A君の何とも満たされない思いはどうなるのだろうか。

親も先生も、子どもをめぐる大

人は子どもの出あう新しい環境に

何とかして慣れさせようと一しよ

うけんめいなのである。子ども達

も一しよけんめいなのである。

そのお互いの一しよけんめいさ  
があんまりびんと張りつめてしま  
うと……。親と子、先生と子ども

の間にもどこかびったりといかな  
いことができてしまう。



お互いにはりつめないで気らくな何かがほしい四月である。

倉橋惣三先生の『幼稚園雑草』の中に「子どものしもべ」という文章がある。「先生だと思っから間違うのです。私たちは子どもに仕えるのです。」と。そして「私たちは子どもとの侶とか、師とかいいもし、思いもしていながら、なかなかもって子どものことはろくに考えてもないのです。」と指摘されているのをよむたび、私は胸を刺される思いがする。「教うるよりも仕うるの難きかな。」ともいわれている。子どもの目線に下りるということはどういふことか、子どもとともに生活するということはどういふことか、私たち大人、親も、先生も、子どものよき成長を願うあまり、つい視野が狭くなってしまうように、恩着せがましくなったり、ひとりよがりになったり、子どもの心の願いを見落してしまいい勝ちである。

動物園に春の遠足に行った。折から小学校、幼稚園の子ども達で賑やかな入口あたり。先生はまぎれる子のないように「お友達と手をつないで！早く歩いて！」順路を進もうとするのだが中々進めないでいるうち、何人かの子どもが花の植えてある所にしゃがみ込んでしまった。「どうしたの？」と見ると「アリンコー！」という答え。それからの先生の対応について詳しく語ることもないけれど、後で園長さんは「動物園にアリンコを見に行っただようでしたな、あはは！もっともアリンコも動物ですがな」。

自然の中へ大いに入りましょう。殊更遠くへ行かなくても、身近な所に大きな自然の営みを見つけたいものです。私達大人よりも子どもはみつける目が鋭いように思われる。見る、きく、さわる、実物で体ごと感じることをらんまんの春、今こそ充分にしたい。

ウィリアム・A・オルコットが「朝の数分で一日の勝負がきまる」と言っているが、その朝の意味を広げて子どもをめぐる大人としての四月のいみを考えたいのである。

(音羽幼稚園)

